

坂上郎女

若 浜 汐 子

万葉女流作家の中で、短歌七十七、長歌六、旋頭歌一といふ多量な作品を持ち、且つ歌体も長歌の如き、女流の不得意とするものや、他の有名女流の全く手を染めてゐない旋頭歌まで試作してゐる多角的な点で、坂上郎女は万葉女流随一といふことは過褒ではないであらう。

又取材の範圍に到つては、当時の女流として甚だ広く、恋愛歌は勿論、母性としての愛情歌・祭神歌・酒席の詠・農耕に関する歌、尼理願の弔歌等々、他の女流の追隨を許さぬ取材の広さである。ことに集中には極めて少い母性愛を歌に作つてゐることはこの作家の最大の特徴といふべきであらう。

(一)

経歴・恋愛

坂上郎女の出自、経歴については万葉以外の書には知るべきものがないといふことになつてゐる。その万葉の作品・題詞・左註等を総合すると次の通りである。

郎女は、佐保大納言といはれた大伴安麻呂の女、旅人・田

主・宿奈麻呂を異母兄として持ち、稻公を同母弟として持つてゐたらしい。

結婚については、初め、天武天皇の皇子穗積親王に嫁したが、靈龜元年皇子の薨去にあひ、二十才に満たずして寡居の身となつた。養老年中、不比等の第四子藤原麻呂との間に恋愛を得たが、これはどうも永続しなかつたやうである。間もなくその異母兄の宿奈麻呂と結婚し二人の女を挙げた。ところが、この宿奈麻呂との家庭生活も亦程なく終結した模様である。

後、兄の旅人が九州在任中、何の故か彼地に下向してその家に身を寄せてゐたが、天平二年十一月には九州を發つて帰京の途に就いてゐる。旅人は一ヶ月程遅れて帰京。

翌三年旅人は京に在つて、その七月薨じた。相続者たる家持は十四、五才の少年であつたし、大伴氏の佐保家には、支柱となるべき男子は、田主も宿奈麻呂もすでに他界してゐたらしく、稻公は健在だつたらしいが、ともかく、郎女の身にとつては佐保家に対するかなりの責任がかかつて来たことは想像される。ともかく己の子女の養育もあり、といつて中年期

の恋愛は又封じ難く、かれこれなか／＼多忙な生活の中に身を置いたにちがひない。

晩年、その女と家持との夫婦仲に安心しておそらく五十歳を三つ四つ過ぎた頃に亡くなつたのではないかと推測されてゐる。

彼女の相聞歌について考へてみたい。

初め穂積親王に愛せられた彼女は「寵せらるること儻なし」といふ程の寵遇を得たが、その事に関しての歌は親王にも郎女にも一首も見えない。

最も早い時代と推定されるものは藤原麻呂との相聞歌に始まる。麻呂との関係は、穂積親王の薨後とすれば大体二十歳を少し出た頃と見るのが通説である。

- 1 佐保河の小石まがひ踏み渡りぬばたまの黒馬の来夜は年にもあらぬか 4五二五
- 2 千鳥鳴く佐保の河瀬のさざれ浪止む時も無し吾が恋ふらくは 4五二六
- 3 来むといふを来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じといふものを 4五二七
- 4 千鳥鳴く佐保の河門かほとの瀬を広み打橋渡す汝が来と思へば 4五二八

の一連四首は、麻呂の贈歌三首に和へたものである。更にその頃同じ麻呂を対象としたものであらう次の旋頭歌一首があ

る。

- 5 佐保河の岸のつかさの柴な刈りそね在りつつも春
し来らば立ち隠るがね 4五二九

これらは郎女若き頃の、しかも集中第一に現れる郎女の相聞歌として注目されるものである。しかし、作品の上ではあまりにも、古歌先誦に頼りすぎた技巧の歌である。それは、麻呂の歌の低調に比しては幾段かまさるが、それにしても己の真情を傾け尽して歌ふべき相聞歌に於て、たとへば例1の歌は、十三卷三三三の「川の瀬の石ふみ渡りぬばたまの黒馬の来る夜は常に有らぬかも」をそつくり拝借、例2は同じく十三卷三三四の「阿胡の海の荒磯の上の小浪吾が恋ふらくは息む時もし」の三分の二を借り、例3は十一卷二六四〇の「梓弓引きみ弛なべみ来ずは来ず来ば来そを何ぞ来ずば来ばそを」と全く類型である。自ら作歌する力に欠けてゐた人ではない。それがかういふ模倣をするといふことはその作歌態度に遊びがあるわけである。遊んでゐられるといふことは、この恋愛に切実性がなかつたものといふことが考へられる。

尤も麻呂との交情は、その後破綻を来たしたもののか、麻呂の生存は後年まで続くのに、その後は打ち絶えてゐたやうである。

間もなく彼女は異母兄の宿奈麻呂と結婚、二女の母となつた。しかし、宿奈麻呂との間に交されたと明確に知り得る相

聞歌は一首も見えない。

このことは何を意味するのだらうか。

宿奈麻呂との結婚の動機は、恐らくは、麻呂との愛に破れた女盛りの身を寄せる相手として最も間近かな者を選んだのではなからうか。さして深い愛情の醸成される暇もないままに相聞歌を作る機運にも恵まれなかつたか、或は同族居を接してゐた故か、それにしても相聞歌があつたら一つや二つは集に遣されさうな気がする。やはり宿奈麻呂との仲は、唯、生活的交情以上に發展しなかつたのではあるまいか。

ところが、宿奈麻呂との夫婦生活には又變動がやつてきたらしい。

旅人は神亀五年九州で妻を亡つた。郎女が九州の帥の家に寄居したのは、妻亡き兄の家事を扶ける為だと従来多くの人には解釈する。若しこの時、家庭生活にあつたとすれば、幼児を京に残して、たとへばどんな必要に迫られたにせよ女の身で、当時として、九州にまで下ることは考へられない。このことは宿奈麻呂との家庭生活の終焉を語るものとの解釈を成立させる。その終焉とは宿奈麻呂の死を考へさせる。宿奈麻呂の官位の記載が神亀元年従四位下と見えるのが最後といふこともその一つである。

ともかく結婚生活を脱した郎女が、幼児を母に托してわざわざ九州の旅人の家に起居するやうになつたことには深いわけがあるだらう。これを、妻亡き異母兄の後妻となつたと

解するのも強ちに退けられない説である。

この九州在住中と思へる時期の相聞歌。

6 黒髪に白髪交り老ゆるまで斯かる恋にはいまだ逢

はななくに

4五六三

7 山菅の実ならぬことを吾に依せ言はれし君は誰と
か宿らむ

4五六四

この歌のすぐ前にやはり太宰府の役人だつた大伴百代の恋の歌四首がある。二者相並んで居り四囲の状況から唱和の相聞歌と諸家は解いてゐる。旅人との結婚関係は暫く不問とするも、若しこの両者が恋愛の関係にあつたとすれば、これは又からかつてゐるやうな歌で、決して純情真剣な恋だつたと解し得ない。

郎女は天平二年十一月九州を發つて帰京の途次次の二首を作つてゐる。

8 大汝少彦名の 神こそは 名づけ始めけめ 名の

みを 名見山と負ひて 吾が恋の 千重の一重も

慰めなくに

6九六三

9 吾が背子に恋ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ恋
志貝

6九六四

この恋の相手は百代だらうか。どうもさうとは受取りにくい。或は旅人だらうか。非常に激情的な表現をとるが(これも先行作品の模倣)、却つて内容は空疎な感をうける。これらの恋も亦順調な経過を辿るものとは思へない。

帰京後の郎女は、旅人の死といふ大事に遭遇し、且つ母として或は一族の上に位する女性としてかなり多忙な生活ではあつたが恋愛行進は続いたらしい。同族大伴駿河麻呂との関係、親族安倍蟲麻呂との関係等は、必ずしも編者がわざわざ註記するやうな、女孫姑姪起居を問ふたり、聊か戯歌を作つて問答するだけの単純な問柄とのみは見難い。

要するに郎女の恋愛は最初の穂積親王との死別が大きい蹉跌となり、それ以後、彼の女の年長けると共に、その性格の積極性奔放性は花々しい恋愛遍歴をさせたが結極心足りた恋愛は一生に得なかつたものと思ふ。数多くの彼女の相聞歌の一つとして、心に深く根を下したと思へるものはないからである。さうした恋愛が、そのやうな歌を生み、そのやうな作歌態度であればこそ、うち込んだ恋愛も出来なかつた、とも言へるだらう。

母性愛 (二)

恋愛・結婚に本当の開花結実をみなかつた郎女の生涯に、その本当の心を注ぎ得たのは母性愛である。上娘の大嬢は天平十一年頃には家持と結婚したらしいが、この二人の結合は郎女にとつても満足すべきものであつた。甥であり婿である家持には結婚前にも

10 吾が背子が著る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ家

に至るまで
といふ程の愛情を注ぐ。

郎女が跡見の庄に居た時、佐保の宅に残つてゐた大嬢から贈つた歌に対し二首を以つて報いてゐるが(4七二三、七二四)その中には母子の愛情を限なく物語つてゐる。娘も相当母には甘へ、この母も亦娘の母恋ふ心を無上に嬉しがつてゐる。この後、竹田庄に在つてもこの大嬢には慈愛の歌を贈つてゐるがその一つ

11 早河の瀬に居る鳥の縁を無み思ひてありし吾が児
はもあはれ
4七六一

はいかにもよくその情が滲み出てゐる。この娘は母の秘蔵子であつたか、後年、夫の任地越中へ下つた時にも綿々とした母の情愛の歌を長歌と反歌にまとめてゐる。さうしてこの一連は恐らく郎女の最晩年の歌であらう。

万葉集中には親子関係の歌は防人歌を除いては、憶良の作の如き著名なもの外極めて寥々たるものである。恋の遍歴に疲れ果てた女の身は、最後に母としての愛情に幸福を見つけたものか、いづれにせよ、この母性の歌は万葉の中の暁天の星のやうにその存在をあざやかならしめてゐる。

氏の母・家刀自

少くも四十才を越えるまで恋愛行進に忙しかつた郎女も、漸く老に近づき、且つ氏上安磨の女、旅人の妹、という地位にあつてみれば漸次氏族間の女性の中心的存在になることは

自他共に許したに違ひない。まして旅人の妻すでに死に、実母の石川内婦命は郎女と佐保宅に住んでゐたから実際の家事などの援護にはその力を借りたであらうが、大伴氏の祭祀や、佐保家を中心とする親族全体の総轄、或は領有地の耕作取穫の督促、などいふ点には、郎女自身が当るのが当然であつた。ことに旅人の薨後、相続人たる家持はまだ少年期で以上の地位に立つよしもなく、支柱を失つた佐保家として勢の赴くところ郎女の双肩に重責が懸るのは当然である。そうした中にも最も重い任務は氏族神の司祭である。

元来、神の祭に女が関与することは古い習慣であつて、記紀その他の古書にも無数にその例証は挙げられる。万葉の中にもいくつかその例示を見るが、中にも四四三、一七九〇、三二八四―三二八八、乃至は四二〇など、その顯著なものである。ことに郎女のは、氏族の上位の女としてその氏神を祭るといふ点にその特徴がある。その長歌を掲げる。

12 ひさかたの 天の原より 生れ来たる 神の命

奥山の 榊の枝に 白紙つく 木綿とりつけて
 齋瓮を 忌ひ穿り居ゑ 竹玉を 繁に貫き垂り
 鹿猪じもの 膝折り伏せ 手弱女の 押日取り懸
 け かくだにも 吾は祈ひなむ 君に逢はじかも

3三七九

これは、題詞には明かに神を祭る歌とあり、左註に氏の神たることを述べ、歌中に祭の方法を具さにのべてゐる点貴重

な文献でもあるが、この歌を通してみるとそもそもその祭は一体何の目的で行はれたものだらうか、と考へたくなる。

氏の神を祭る場合の最大の意味は、氏族全体の意志なり希望なりを負うて或は感謝し祈願し、その幸福を得んことを目的とする筈である。しかるにこの歌の内容は明らかに恋の成就の祈である。他人の恋ではなく、とりもなほさず郎女自身の恋のねぎごとである。しかし、郎女の位置に於て氏神を祭るに、氏族全体の幸福に関する祈を抜きにして、いくら郎女でもいきなり自分の恋の成就のみを祈願するとは思へない。

惟ふに、氏族の祭は公的に行ひ、その際に郎女個人の恋の祈念をこめ、それを詠作したものであらう。左註に「聊かこの歌を作る」といふのもその辺の事情であらう。

ともあれ、さういふ氏族神供祭の際にも、抜目なく己の恋の成就を願つて歌にまでしてゐる中年女郎女の恋愛没入には、この祭に係つた氏族の中の人々もさぞかし眼を瞠つたことであらう。

この外、天平九年四月には山城の賀茂神社を奉拝に出かけてゐる。何故他氏の神へ詣つたか理由は明かでない。

この外、氏族・親族などの集宴にはまめに臨んだらしい。

13 山守のありける知らにその山に標結ひ立てて結の辱しつ

四〇一

これは駿河麻呂と贈答したもので、普通には娘の二嬢の婿と選んだ駿河麻呂に他の女のあつたことを親族の前ですつぱ

ぬいたことと解せられてゐる。もしさうとすれば油断のならぬ家刀自である。この駿河麻呂とは郎女自身恋愛關係があつたらしいから、或はその報復的手段かもしれない、とすればますます辛辣な手腕である。もう一つの酒宴歌

14 斯くしつづ遊び飲みこそ草木すら春は生ひつつ秋
は散りゆく 九九五

は一種の諦観に入つた心境も見え、氏の長上者たる貫録も具はつた佳作である。

15 酒杯に梅の花浮けて念ふどち飲みての後は散りぬ
ともよし 八一六五六

これも酒宴歌だらうが、この方はかなり刹那的飲樂感を露出してゐる。或は旅人の讚酒歌の影響か、乃至は思想そのものの影響によるところ多いかもしれない。郎女はかうした花やかな酒席を殊更好んだと思へるが、又いつもさういふ席には親族の方からひつぱりにくるだけの地位と、又、愛敬とを持たれてゐたとも思はれる。

郎女が、かなり世話好きだつたらしいことは種々な点から推測出来る。天平七年、佐保家で面倒をみてゐた新羅の尼の理願といふ者が亡くなつた時、母の石川内命婦は有馬に入湯中だつたので、郎女は葬送万端を執り行ひ、その報告を長歌、反歌に作つて母の許へ送つてゐる。理願は旅人在世中身柄を佐保家に寄せてゐたが、旅人薨後の数年は専ら郎女を中心とする佐保家で面倒みたわけ、その終焉をまで厚くしたのである。

この外弟の稻公に義女の田村大嬢をとりもち、弟の為に恋歌の代作までやつたり。この方面でもなかなか行き届いてゐる。

当時大伴氏の領有した庄は大和の各地にあつたらしいが、そのうち跡見と竹田には郎女自身屢々出向いてその田の管理をし、又自ら播種・收穫の農耕事にも當つたらしい。(八一五九二・一五九三)。大氏族の上位に立つ女性で、かうして自ら耕作の体験を作歌にしたといふ明確な例は他に見ない。その点でも亦この作者の特徴を示してゐる。

(三)

作家として

郎女は旅人を兄に持ち、家持を甥に持つ外万葉に名を連ねる多くの作家を近親一門に持つてゐる。当時の歌壇は奈良朝最盛期で、人麿以後、憶良や赤人、蟲麻呂、金村、福麻呂その他著名作家の前後して出で、作歌意識の盛り上つた時代の中に在つた。郎女は旅人と共にさういふ歌びと達にも何かの機会には接して、何らかの刺戟をうけたことはあつたらう。当時の歌壇が今日のやうな意味を持つてゐなかつたにせよ、まんざら無縁であつたとは思へない。

殊に、大伴氏の佐保家といふ、歌に關係深い家の者として、文獻的には古今の作品に目を曝す機会を持つて居たことは想像できる。

天平二年正月十三日、太宰府の帥の家で梅花の宴が催され

た時、郎女は兄の官舎に起居してゐたに違ひないが、梅花三十二首の中にはその名は見えない。「員外故郷を思ふ歌兩首」及び「後に追ひて和ふる梅の歌四首」は旅人の作だらうと考へられてゐる。郎女は主人側として酒席の斡旋役をしつつ、詠進出来る立場ではなかつたとしても、ひそかに作歌はしたかも知れない。右の外にもさういふ員外の歌はあつたらうが今日見られないのは残念である。しかし、その席で披露された歌はさきとく耳目に留めてゐたらしい。既記の「酒杯に」の歌は明かにその時の諸家の作品から影響をうけてゐると思はれる。「春柳鬢かみに折りし梅の花誰か浮べし酒杯の上に（八四〇）」「梅の花夢に語りく風流びたる花と吾思ふ酒に浮べこそ（八五二）」に発想と表現のヒントを得てゐることは否み難い。又下句は八二一の笠沙弥の歌の下句そのままで完全な拝借である。

彼女の作歌意識はかなり旺盛だつたらしいが、それは先行作品に充分注意の眼を注ぎ、そこから如何なるものを自己の作品に吸収するかといふ意慾に外ならないとも言へる。彼女の模倣慾は徹底して居り、自己の周囲に見聞する作品には、時代と作者を問はず、実に貪慾と見えるまでその表現を或は発想を真似る。といふことは、それだけ常に歌の勉強に励んだといふことにもなる。殊に人麿などの作品は数句をそっくりそのまゝ取り込むが、それは、歌風や思想の影響を受けたといふものではなく、修辭的模倣に限られてゐる。無名作家では、七卷、十一卷、十二卷、十三卷等から夥しい影響をう

けてゐる。紙数の点で例歌を挙げられないが、この傾向は奈良朝後期歌壇の通弊とも言ふべきである。郎女ほどの力倆ある作家にして、それ程丹念に古今の作品に学びつつその形体的模倣に汲々としてゐたことは残念な氣がする。尤も二三、彼女の新風を示す作品も無いではないが、多量の作品中の大部分は模倣の巧みさと、その持つ才氣とで作り上げた觀が多い。

ともあれそれが郎女の力倆であつた。多角多面にあらゆるものをこなして作品化する技と力にかけては万葉女流中他に及ぶものはない。吾々は先代に倭太后や額田王・鏡女王らの如き悠遠重厚なる歌風を見、持統天皇・志斐姫・藤原夫人らの如き高雅なユーモアをその作品に見て来た。又、郎女と同じ時代に常陸娘子・児島の純真可憐、笠女郎の深い哀愁、狭野茅上娘子の清潔な熱情をその歌々に見て人に迫る力の強さに感動する。郎女にはさういふものが無い。しかしながら作家としての彼女らは一つの面をしか読者には見せてゐない。その一つの面は甚だ貴重なものであるけれど、人間の持つ他の面を読者は作品から知ることが出来ない。坂上郎女は上に述べたやうに、人間として、女としての各面に立つて作歌してゐる。ここに作家坂上郎女の一つの価値を見出すことが出来るのである。